

焼きついて離れません。

まだ寒中に切断左手指が疼きます。

シベリア抑留記

新潟県 宇野 公夫

八月十五日終戦の日を迎えシベリア抑留生活が始まろうとはだれしも想像もしなかったので、ある人は四年ないし五年の長期間にわたり苦闘を経験し、復員し、その後日本復興のため全力をふるい生き延び今日を迎えております。

また、不幸にも猛烈な寒さと食糧不足のため、病魔に冒されてかの地で若き命を落とされた人たちも数多く、これら人々のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

終戦から武装解除まで

小生は北鮮会寧泰二二一五三部隊（歩兵部隊）に入隊の初年兵で、一期検閲後鐘城の奥地蒼坪でタコ壺堀りに従事し、八月十二日から十五日まで斥候として（五人）

南陽から鐘城に通ずる小高い山で眼下を走る道路の監視を任務として過ごし十五日晩、山よりおり大隊本部により斥候任務を終了した旨申告しましたところ、ご苦労だけれども一回山へ登るよう命令され、再び前回地点まで行くべく沢登りを始めたが、途中雨となり仕方なく野宿、翌朝十六日任務地点に到着、昨晩ぬれた軍服、下着類を乾燥しておったところ運悪くソ連飛行機に発見され銃撃を受けたが、全員無事で任務遂行しておったところ、夜八時ごろ中隊よりの迎えにて下山、隊に合流し早速その晩陣地を出発しました。十九日午後二時ころまで満州図們に集結の命令で、全員武器及び完全軍装で山中を歩きつづけようやく十九日午前図們に到着したところ、早速武装解除されました。携行食糧も少なく翌日からの食物に事欠き、先着部隊の人から満鉄の官舎へ行つて何か調達した方がよいと聞かされ、早速官舎へ行つて見たが、食物らしいものは何もなく、あったのは馬糧のコウリャンだけで、二、三日経過して延吉へ出発、抑留生活の第一歩から食糧に悩まされました。

延吉からクラスキーへ

図們に数日滞在して奥地延吉へ移動、旬日にして図們經由琿春峠を越え入りました。着いたところがクラスキーの大地で約一か月間幕舎生活しますが、携行食糧乾パンのみであろうとは。馬糧コウリヤンを一日中飯ごうで炊き毎日を通しました。

クラスキーからコムソモリクスへ

冬を迎えようとするとき「東京ダモイ」の声にだまされ貨車に乗せられて奥地へ、車中寝て起きると車内の天井が一面白く凍りつき「東京ダモイ」がうそであることがわかり、こうして四、五日してある場所へ停車、早速ダワイ、ダワイでせかさされ貨車よりおり、着いたところが収容所コムソモリクス第四収容所でした。馬小屋を改造した二段式ベットの簡単な建物でももちろん電灯などなく、灯火は作業に出かけた折り貨車の車軸から油を抜き取りランプ式にして明かりをとりました。翌朝お互いの顔はすすで真っ黒くなっており、笑えない状態でした。

ここはアムールの川岸にあったので川船からバレイショやサケのたる詰め等の荷上げ作業で食事も満足にたれなかったので、作業帰りに各自が軍袴の下をしぼり袋

状にしてその中へバレイショを入れて帰ってきましたが、それを見ていたソ連警備兵は「ヤポンスキタコイダ」とまたを開いて笑って話しかけ、またサケのたる詰めをわざと橋げたにぶっつけてこわしてサケを抜き取り食糧として通していました。また、この収容所での思い出として、同僚と組んで炊事場のほりの上に登り、炊事用の釜の中へ飯ごうをつりおろしておもゆ相当の食事をかすめとった記憶がよみがえってきました。

等級食時代を迎えて

在ソ三年間の一番苦しい思い出の等級食時代のころは、山中の収容所に転属され伐採作業に従事し、ノルマ遂行のためすき腹で奮闘したものです。この収容所は無人のところへ入ったのですが、最初にやった仕事は道路づくりでした。何しろ湿地帯の中で道路建設が行われ、腰まで水中につかりながら赤松を切り出して土台づくりしたものですけれども、何分重くて十六人がかりで三メートルくらいの赤松を井げたに組んで土台としてその上に木の道路をつくり、形ばかりの道路を完成させました。さて伐採作業のノルマ一〇〇％は、末口十センチの

六メートルのもの五十本で、枝の焼却までの仕事でようやく四百五十グラムの黒パンにありつけるため、作業環境のよい山に入るときはひも類すべて持参し、木に目印をしてノルマ確保に努めました。

大木一本切り出すと幹の方には何も小枝がないので、何とか四百五十グラムのパンにありつけたものですが、条件の悪いところではとも四百五十グラムのパンは食べられそうもなかったので、あきらめて終日山中で体を温め、もっぱら体力維持に努めて毎日を過ごしておりました。

そのうちに作業内容が変わり、材木のトラック積みとなりました。この作業は特別十二時間労働となったため四時間の超過勤務となり、これに対して賃金の支給を受け、当時四キログラムの黒パン三十ルーブル程度でしたが、運転手に金をやり町のバザールから買ってきてもらい飢えをしのぎ、また戦友にもおすそ分けなどしました。この作業のためトラックが来ると作業に狩り出されたものですが、ある日零下五十数度の猛烈な寒気の日も狩り出され積み作業に従事したけれど、在ソ三年中に一

番一生懸命に仕事をしました。あまりの寒さのため自分で身を守らなければならぬため、体を働かし体温の調整を図ったものです。

このようにある時期は四百五十グラムのパン獲得のため知恵をしぼり、またあるときは我が身をかわいがるため全身を働かしたものです。また、この収容所が閉鎖された折、五百人収容のうち四十人程度残留させられその中の一員でした。他の人は東京ダモイで出発したため、ややくそになり材木集積所にあった材木を燃やし営倉生活三日間、この間食糧は一日百五十グラムのパンと汁ばかりのスープだけでした。二十一年の正月の食べ物はずっと昔の日本製の肥料用のニシンで過ごしたことなど思い出されました。

そのうちにいやな等級食の時代も去り、町の収容所へ変わり、道路作業に建築作業にと狩り出され、二十三年によく復員となり、祖国の土を踏んだものです。